

生涯学習情報誌

Life Learning

7 2016
Jul.
NO.311



「しがらみを解く場と学びのデザイン」

第一部は、「ほんとうの学び」の場づくりを深く研究してきた、認知心理学者の佐伯^{ゆたか}氏の講演、第二部は講演内容についてトークセッションを行った。

■ 集団主義と三人称的思考

佐伯氏は、アメリカ留学時に友人と議論して言われた一言に衝撃を受けた。「キミの話は、何が真実だとみなされているか、ばかりだ。キミ自身は、いったい何が真実だと思っているんだい?」。確かに論文も、「〇〇がそう言っていた」という引用情報ばかりになっていた。

こういった、一人称で考えない、三人称で考える原点は、幼稚園時代から始まっている。「〇〇組さんは集まりましょう」。家庭でも、「今日は、みんなの仲間に入れてもらえた?」。なぜ、日本では集団・グループが大切なのか。それは、安心社会と信頼社会の違いである、と佐伯氏は考える。

日本は安心社会で、仲間であることの連帯感を大切にする。コミュニケーションも、お互いに裏切らないことを確認しあうためのものとなる。あるゲームの実験によると、日本人は最初の一手を「相手は裏切るかもしれない」と想定した手をうつ人が多く、アメリカでは反対に、「とりあえずは信用しようではないか」という一手をうつ人が多かったという。

■ 「自分」の復権

ある学生が怒りながら佐伯氏に相談にきた。利き手ではない左手に箸を持って牛丼を食べるとうまく食べられない。右手に戻すと、実は丼を持つ左手が上手にその傾きを調整しているのに気づいた。それは彼にとって深い学びだったが、だれもまともに取り合ってくれない。「何が学びかは、本人が決めることでしょう」と。

本人が面白いと感じることを試しながら、だんだん物事が判っていく論文には「それはあなたにもあるでしょ?」という触発的ヒントがたくさんある。

「面白いかな?」ということに敏感になるのが大切。「面白くなければつまらない」と佐伯氏は言い切る。

■ 「文字」的思考と「絵」的思考

文字的思考は三人称的な評価を下すが、絵的思考はその場に自分を投影する。人類は長い間、絵で考えていた。現代のように



100名の参加者で満席



トークセッションでも熱い佐伯氏

2016年3月20日 京都市梅小路公園 緑の館イベント室

第一部 講演：佐伯 胖 田園調布学園大学大学院 教授

第二部 みんなでトークセッション!

ナビゲーター：蓮 行 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任講師

聞き手：中脇健児 特定非営利活動法人ワークショップデザイナー推進機構 理事

ミルクは、注ぎ始めではなく、注ぎ終わらんとしているところであることが絵を見るとわかる。絵は「今、なにが起きているのか」という時間の流れも含んでいる。

佐伯氏の娘さんが「59-20」という引き算がわからず悩んでいたとき、絵に描いてみることを勧めた。娘さんが10円玉5つと1円玉を9つ書いたので、「引くというのはプレゼントしてあげることだよ」と言うと、10円玉2枚を×印で消した。それにとどまらず、その×印の周りを箱で囲み、プレゼントのリボンを描いた。そうしてやっと娘さんの中で20が消えたのだ。

■ 「すべき」を定義してはいけない

自分を大切に思うと、他人も大切に思うことができる。人は呼びかけられることで、一人称性の確立と同時に、応答する他者を発見する。相手を二人称的に見るということとは、相手を人間としてみるということ。そして、相手のことが「わかる」と同時に、「わからないかもしれない」という未知性・不確定性をつねに想定しなければならぬ。それが他者と尊厳ある人間として関わること。「しがらみを解き、グループ意識を捨てろ」と訴えた。

トークセッションでも、「われわれファシリテーターが実際にどう関わっていくべきか」という問いかけに対し、佐伯氏は「その『すべき』というのが三人称なのでは?」「徹底的に好きになれということ」「おぬし、それ、いいじゃない! でいいんだよ」と会場を沸かせた。



蒔絵螺鈿八稜箱「彩華」(2002年)
国(文化庁)保管



陶胎蒔絵波文水指(2008年)

漆芸(蒔絵) 室瀬和美

Murose Kazumi

- 1950年 東京に生まれる
- 1975年 第22回日本伝統工芸展にて「冬華文蒔絵飾箱」が初入選
- 1976年 東京藝術大学大学院修了(修了制作大学買い上げ)
- 1985年 第32回日本伝統工芸展にて蒔絵飾箱「麦穂」が奨励賞
- 1991年 目白漆芸文化財研究所開設
- 1996年 三嶋大社蔵国宝「梅蒔絵手箱」模造制作(～1998年)
- 2000年 金刀比羅宮本殿拝殿格天井「桜樹木地蒔絵」制作(～2004年)
- 第47回日本伝統工芸展にて蒔絵螺鈿八稜箱「彩光」が東京都知事賞
- 2002年 第49回日本伝統工芸展にて蒔絵螺鈿八稜箱「彩華」が奨励賞
- 2008年 重要無形文化財保持者(人間国宝)認定
紫綬褒章受章
- 2013年 「工芸からKÔGEIへ」展出品(東京国立近代美術館工芸館)
- 2014年 「人間国宝の現在(いま)」展出品(東京国立博物館平成館)

重要無形文化財保持者の室瀬氏は、国宝や重要文化財の修理や模造を制作する仕事も依頼される。何百年も前の仕事から学ぶことは多く、伝えることの大切さを肌で感じている。一方で、漆器がもつとつと現代の人々に正しく理解され、生活の中で使われるよう、第一人者として啓蒙やPR活動にも取り組んでいる。

——文化財の修理や模造から学ぶ点はありますか。

修理時に表具を剥がすと書き付けが出てきたり、金具を外して見ると、下の塗膜が見えて、当時はこんな色だったのが500年経過するとうなるんだとわかったり、勉強になります。だから私の作品も、20年後はもっといい色になると予測できるので、あえて最初は沈み気味に仕上げます。私の死後、100年、200年経過した時に見た人は、また違うものが見えると思います。修理や模造制作を通して実感しました。

2013年に伊勢神宮の式年遷宮がありました。遷宮は、伝統技術を次世代に伝える意味でも重要だと言われますが、建物だけでなく納める御神宝などもつくり直します。儀式の後には各社に納められて、神職さんでも見られません。工芸には、使えるけど使わないものに最高の技術を用いる場合もあるということです。

——海外へのKÔGEIの普及にも力を入れていますね。

日本の工芸の特長は、日常使うものから美術品として鑑賞するもの、さらには神様に奉納する特別なもののまで全てが含まれることです。西洋では美を鑑賞する『アート』と普段使う『クラフト』を分けて考えます。明治時代の役人がクラフトを工芸と、ラッカーを漆と結びつけ

たことから、150年以上誤解され続けています。私はこの誤解を解くために、工芸はKŌGEI、漆はURUSHIと、そのままの言葉での発信を進めています。

——日本人自身の理解も大切ですね。

それが一番大事です。元々日本では、国宝に指定された絵画も、屏風や襖など、生活の中で使うもので、工芸と同じ価値観です。工芸は作って完成ではなく、使う人に渡って、その人が使い込んで初めて完成に至ります。作り手と使い手がコミュニケーションしながらモノを作っていく文化なのです。日本人は生活空間の中にアートを取り込んで来ました。この独自の文化を私たちは理解し、伝えていく必要があります。

——生活に取り入れやすい漆器の役割は大きいですね。皆さんが毎日食べるご飯。ご飯をなぜ陶磁器の茶碗で食べるのでしょうか。茶碗は熱い茶をいいタイミングで提供するために、早く冷める陶器や磁器が都合が良かったのですが、ご飯はゆっくり楽しんで食べたい。そうすると保温力のある漆器が最適なんです。

この話が80歳で3度目のエベレスト登頂にチャレンジする、プロスキーヤーの三浦雄一郎さんに伝わりました。6000m以上の極寒の地では、プラスチックや金属の器だと、温かい食べ物もすぐに冷めてしまうそうです。そこで私に「エベレストに持っていく漆器を作ってほしい」と言われて作りました。実際に登頂時に使ってくれて、本当に冷めないのが温まり助かったそうです。また、雪を溶かして石が混じった水で漆器を洗わざるをえないのだけど、表面は傷になっても、割れたり剥がれたりはない。漆は強いんです。

——漆は洗いかたが扱いが難しいと言われますが。

それも誤解です。洗剤にも強い。酢の物も大丈夫。濃塩酸と濃硝酸を混ぜた金属も溶かす王水でも溶けない。洗った後も置いておけばすぐ水が切れます。毎日使うな

三浦雄一郎のエベレスト登頂隊が、ベースキャンプの食事で実際に漆塗りの碗を使っている風景。通常より重心を低くする工夫がされている。



漆を塗り重ねる手順の見本。下地の工程だけで10数段階、塗っては研いでを繰り返す。完成したら途中は見えない。



柏葉蒔絵螺鈿六角合子(2014年)

ら全然大丈夫。年に1回だけ使うようなものは、何か着いたまましようとカビるから、すぐ拭き上げることは当然です。「扱いに気をつけて」と書いてあるのは、見えない工程の手を抜いてしっかり作ってない証拠です。

——しかし、売り場では良い物はいいお値段ですね。

値段が高くて大丈夫で作ってあれば何10年でも使えるので、結果的には高くありません。問題なのは、漆に対する知識を正確に理解している売り場の人が少ないことです。これからは、小さな工房の良い作り手に出会う場をもっと作っていききたいです。

このシリーズにも登場した陶芸の前田さんや竹芸の藤沼さんたちと、10歳以下の子供に体験してもらう場を提供しています。子供の中から質感を体で感じれば、目をつぶってもさすれば漆はわかる。大人になってからではプラスチックと違いがわからない。漆器の良さを小さい頃から体で覚えて貰う機会は重要だと思います。

——作り手としては何を次代に伝えたいですか。

技術や形を伝えるのは伝承。見えない価値観を伝えるのが伝統です。作るものは時代とともに変わって、その時代の人の美感を後世に伝えることが大事。そうしないと平成の感性を数百年後の人に伝えられないでしょ。

でもいつの時代も、面倒を嫌がると文化はなくなるんです。「手間があるから文化なんだよ」と、子供たちにも言っています。



聞き手:上野由美子(右)

古代オリエントガラス研究家。UCL(ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン)考古学研究所在籍中。2012年国際日本伝統工芸振興会の評議員。ARTP副団長として王家の谷発掘プロジェクトに参加(1999年~2002年)。聖心女子大学卒業論文『ペルシアガラスにおける円形切子装飾に関する考察』、修士論文『紀元前2000年紀に於けるコア・ガラス容器製作の線紋装飾に関する考察』ほか、執筆・著書多数。

乳がん闘病体験からギフトボックスとケア用品を開発 女性の逆境やコンプレックスをときめきに変えたい

「ソーシャルビジネスグランプリ

2016」でグランプリを獲得した塩崎良子さんは、5月に会社を設立した。社名は株式会社TOKIMEKU JAPAN。がん患者がときめくケア用品やファッションのブランドを立ち上げ、これらの商品とともに、がん患者がもらってうれしいプレゼントをネット販売するギフトボックスを運営する会社だ。

■苦しいがん治療の中で見つけたもの

塩崎さん自身が若年性乳がんになったのは33歳。26歳で起業し、セレクトショップやドレスレンタル事業を好調に展開して来た矢先だった。突然に世界が白黒になった。すぐには受け入れられず、自分だけが異次元にいるような感覚。

さらにつらい抗がん剤治療が続く中、いっしょに一喜一憂してくれる家族や友人の存在があった。つらいのは自分だけじゃない、励まし支えてくれる周りの人たちのために頑張ろうという思いが前を向く力になった。

■がん患者によるファッションショー

治療も終わりに近づいたころ、主治医から提案され、塩崎さんが中心になり企画したがん患者によるがん患者のためのファッションショーは、2015年7月、乳がん学会のイベントの一つとして開催された。多くの女性ががん患者や元患者がモデルや裏方として参加し、自信を取り戻せたと喜んでくれた。

女性ががんになると、髪の毛が抜け落ちたり乳房を切除せざるを得なかった



入院中、哲学や宗教などの本をたくさん読んだ。その中に、自分の最大の強みになると予感させる言葉があった。あのスティーブ・ジョブズも座右の銘とした「明日死ぬと生きて今日を生きなさい」という、マハトマ・ガンジーの言葉。その続きは「永遠に生きるつもりで今日学びなさい」

■連絡先

Mail: ryokobaby777@gmail.com

り、女性としての自身や尊厳を喪失してしまい、ファッションや美容などにも無関心になりがちだ。そこから元氣を取り戻す後押しをしたい、ときめく気持ちを取り戻すきっかけとしてほしい。その思いと自らの体感をもとに、ケア帽子やアンダーウイグ、下着、洋服などを開発中だ。高品質の製品を提供するため、信頼できるアパレル企業と提携している。

ギフトボックスは9月公開予定。自分が闘病中、オーガニック化粧品やクスリ

を入れるポーチをもらって、一人じゃないよと勇気づけられうれしかった。贈る人の想いを商品といっしょに届けたい。そんなギフトボックスになる予定だ。

将来的にはプロジェクトの雇用によっても、がん患者のバックアップをしたいと考える。

■社会と会社がいっしょに成長を

社会起業家大学では、多くの社会貢献を考える人がいて励みになった。しかし7年の経営経験を持つ塩崎さんは、思いだけでは事業にはならない難しさも同時に見た。ビジネスのプロとして成長することがまずは大切と感じている。

グランプリ獲得によって、審査員でもあった投資関係者が具体化に向けてサポートしてくれた。数字を見直し、気軽に利用してもらえてきちんと利益も出る価格設定をめざしている。

「誰でも、年齢も含め不安や逆境は必ずあるでしょう。たとえそれが命に関わることだったとしても、いま自分が情熱を向けられるものがあれば、輝いて今を見ていられます。そのきっかけや後押しになるよう、設立した会社が社会とともに成長していけたらと願ってます」

シリーズ

社会起業家

株式会社TOKIMEKU JAPAN代表取締役

塩崎良子氏に聴く